【論　文　提　出　者】　社会文化科学研究科　文化学専攻
英語教授学領域
島村　恭輔

【論　　文　　題　　目】
Japanese University EFL Learners' Willingness to Communicate(WTC) :
From the Perspectives of Learners and Teachers
（日本人大学生英語学習者の英語でコミュニケーションを図ろうとする意志について：
学習者と教師双方の視点に基づいた研究）

【授与する学位の種類】　博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、教師と学習者の双方の視点から、日本人 EFL（外国語としての英語）学習者の教室での WTC (Willingness to Communicate: 積極的にコミュニケーションを図ろうとする意志）に影響を与える要因を明らかにすることを研究目的としている。この研究目的を反映したリサーチクエスチョンは、次のとおりである。(1) 日本人大学生の WTC に影響する要因は何であるか。(2) 外国語としての英語の教室において、学習者の WTC を向上させる助けとなるために、教師は何に焦点を当てるべきか。

「先行研究」の章では、L2（第 2 言語）の WTC に影響を与える、社会文化的コンテクスト、情動的側面等の多様な変数に関するモデル、八島（2002）が提起した、WTC に関連性があり、学習者の国際社会への関心を測る概念である IP（International Posture: 国際的な姿勢)、日本人・中国人・韓国人学習者を含む東アジアの英語学習者の WTC と学習不安に関する先行研究、教室内での学習不安の尺度である、Horwits, Horwits, and Cope (1986) の FLCAS (Foreign Language Classroom Anxiety Scale) 等を中心に綿密なレビューを行ない、WTC を高める要因としての IP の重要性と学習不安の WTC への否定的影響等を指摘している。

予備的研究では、FLCAS を使用して日本人大学生を対象としたパイロットスタディを行い、英語で話すことについて、学習不安が存在することが判ったとしている。また、学習不安の要因についても、Nagahashi (2007) 等の先行研究に照らして詳細に明らかにしている。

「データ分析」の章では、質的データに現れた言葉の下位カテゴリーと主要な全体的カテゴリーとの間の意味的関係を分析するための枠組である、Spradley (1979) の domain analysis（ドメイン分析）が用いられた。また、Vygotsky の ZPD (Zone of Proximal Development: 最近接発達領域）に根ざした、Tharp and Gallimore (1991) の Performance Assistance（教育的指導援助）の概念が、教師へのインタビューから得られたデータを分析するために援用された。殆んどの WTC に関する先行研究は量的な調査データに基づいているが、本論文が、データ分析を踏まえた「考察」の章において、学習者と教師の認知に関する質的な記述的データの収集・分析により、教師が学習者の WTC を教室で高めるための明示的かつ探索的な理論モデルを提示している点は、先行研究には見られない研究上の意義であると考えられる。

「研究方法」の章においては、大学の英語授業での教師と学習者の行動の観察に基づく記録・内省・理論構築ノート、学習者へのインタビュー、段階的に焦点化して実施した教師対象の２段階のインタビュー等の一連の多角的な triangulation（三角測量）により、データの妥当性を高めている。また、エスノグラフィック分析、帰納的にモデルを導き出す分析手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて、データのコーディングとカテゴリー分析を行っている。エスノグラフィック分析におけるコーディング・カテゴリー化は、既存のモデルの直接的な適用ではなく、研究対象(参加者)の視点・解釈を取り入れて行われた。さらに、データの効率的なコーディング・カテゴリー化のために、質的分析プログラムである Nvivo を効果的に活用している。

本論文が、学習者と教師が今後、WTC の向上のために教室で行うべきことに関する教育的示唆を、学習者の視点だけでなく、教師の豊かな直観的知識と経験の明示化・外在化により提示している点は評価に値する。学習者の観点からは、英語力の高い学習者が他の学習者を教室でのグループ活動等において援助すること等の提案を行っているが、包括的な WTC に関する探索的モデルは、学習者に対して精神的・教育的・環境的サポートを提供できる教師を育成するためのモデルの構築にも貢献すると考えられる。

全体として、本論文の構成は明確であり、当該分野に理論的・教育的な示唆を与える研究として評価できる。

以上により、本論文が博士(文学)の学位を授与されるための十分な資格を有していると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成２４年６月２１日(木)に、審査委員会委員５名の出席のもとに実施された。最初に本人から学位論文の概要に関する発表が英語でなされた後に、口頭試問が行なわれた。本人により、学位論文の成果及び関連領域の専門的学識に基づいた応答が適切になされ、申請された学位論文が博士の学位の授与に値する水準にあることが確認された。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査　ラスカウスキー　テリー
委員　アイズマンガー　イアン
委員　山下　徹
委員　隈元　貞広
委員　サガズ　ミシェル